

聖路加看護大学紀要第 40 号に寄せて

聖路加看護学園理事長 福井 次矢

記念すべき第 40 号の刊行にあたり、これまで、本紀要に質の高い研究論文や貴重な記録を残された多くの関係諸氏に心から敬意を表します。本学卒業生・教員の輝かしい足跡からいって、わが国における看護学を確立し発展させるうえで、本紀要が歴史的役割を果たしてきたことは容易に想像できます。今後とも、本学に所属する教員・研究者による論文や記録を収載する定期刊行物としてさらに発展することを期待しています。



2014 年は本学にとって変革の年となります。そして、そのことが将来の看護学研究の発展を約束するものであってほしいと願っています。変革の第一は、2014 年 4 月 1 日からの大学名の変更です。「聖路加看護大学」から「聖路加国際大学」に変えることが、文部科学省で正式に認められました。変革の第二は、「一般財団法人聖路加国際メディカルセンターと学校法人聖路加看護学園の一体化構想」の進展です。そうすることにより、看護教育カリキュラムの大幅な改革（臨床実習の量的質的充実、多職種間でのチーム医療学習、国際看護教育の充実など）が可能となり、本学が設立当初より果たしてきた看護教育の先進性の維持も視野に入ります。同時に、より効率的な大学運営が可能となり、近い将来、新たな学部の増設や大学全体の拡大・発展も可能と思われれます。

このような変革が実現すれば、看護分野における研究もさらに発展することでしょう。典型的な医学研究－体を細分化する生物医学研究、日常とは異なる状況下での特定の要因の作動状況分析など－とは根本的に異なるリサーチクエスチョンを扱う看護研究を、より科学的により国際的に行うためには、解決しなくてはならない難問が山積しているように思われます。様々な学問分野の研究者が同じ大学に所属し、物理的にも近接していれば、看護研究のテーマや方法論の改善に益するところが大きいはずで。私が以前在籍していた大学では、ノーベル賞受賞者を含む外国人研究者と日本人研究者からなる研究に関する外部評価委員会を設置し、医学研究科の全教授に、過去 5 年間の研究実績と今後の展望について、30 分間の英語でのプレゼンテーションを求め、結果は点数評価され、ランキングまで行われました。この経験を通じて、研究のアウトプット（研究論文などの短期的・直接的成果）とアウトカム（研究が社会にもたらす成果・影響）を意識して研究することの重要性、世界を相手に研究することの厳しさ、そしてやりがいを感じました。

本学の教員・研究者の皆さんが日本での看護学のリーダーたる位置に安住することなく、今後とも、世界を相手に研究されることを期待する次第です。